

土木学会選奨土木遺産 江戸へ材木を運んだ港

あかさききくみなと 赤碕菊港



鳥取県琴浦町の赤碕港は古くから重要な港で、それを物語るように 16 世紀の明の書に「伯耆の中で、港らしいのは阿家殺記である」と記されています。江戸時代になると鳥取藩 10 港の 1 つとして藩蔵や船番所が置かれていましたが、当時は防波堤などはなく、はしけによって沖合に停泊した船に積み替えを行っていたようです。

明暦 3（1657）年、鳥取藩は江戸大火により藩邸が焼失したため、河本長兵衛に材木の調達を命じました。長兵衛は泉州の堺から船を買い入れ、港を修築して材木を江戸に運びました。菊港の名前の由来は、長兵衛の妻は松江城主堀尾吉晴の孫娘「菊姫」で、息子弥四郎が堀尾を名乗り、海運業を引き継いでから、「菊姫の港」と呼ばれるようになったからということです。

『鳥取藩史』によると、菊港の防波堤は享保・元文（1716～1830）頃に東堤が、その後西堤が築造され、現在のようなハの字型をした菊港になったと言われています。その後、幾度か修築されており、当初西堤にあった開口部（潮廻し）は、現在東堤に設けられています。防波堤はいずれも、人の頭ほどある大きな玉石を積み上げたもので、何度か改修を受けながらも江戸期の構造を今に伝えています。

菊港はこの地域の重要港として発展してきましたが、水深が浅いため船揚場を有していましたが、その利用も小型船舶のみに限られていました。このため大型化する船舶への対応ができなくなり、明治以降は東港（亀崎港）に本港の座を譲ることになります。

この亀崎港の築港は、赤碕の東のはずれ松ケ谷に住む岡田茂三郎が、財産の全てを投げ打って取り組みましたが、断念せざるを得ない大事業でした。この事業で岡田家は財力を失いますが、彼の死後半世紀を経てようやく明治政府によって築造され、港としての形が整えられました。現在、本港（東港または旧称亀崎港）、菊港及び西港の 3 港を含めて赤碕港と呼んでいますが、多くの人が関わる土木工事にはそれぞれに深い話があるものです。



土木学会選奨土木遺産「菊港」西堤（左）と東堤（右）
構造：石造防波堤（玉石積み）、西堤：長さ 157.25 m、幅 5.3 m、東堤：長さ 149 m、幅 13.8 m
東堤にある潮廻しとは、港内の堆積を防ぐため海水の流れを確保するもの。

■位置図



旧山陰道に面した「塩谷定好写真記念館」
4 代目塩屋孫平は江戸末期から明治初期にかけて、菊港を母港とする回船業を営み、北前船で米や海産物を商った。



「波しぐれ三度笠」
彫刻家流政之氏によるもので、日本海の荒波を乗り越えて行き来したたくましい海の男たち、それを送り迎えした港の人々。人生の生きざまや哀歓を刻りあげられた作品。北東に向って立つ三度笠は旅を表し、旅は人生そのものを表しているという。



道の駅 ポート赤碕
道の駅の北側に「本港、菊港、西港」をまとめた赤碕港がある。